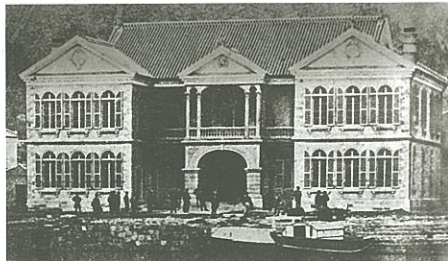


2. 創造・神戸税関の誕生



神戸税関旧本庁舎

明治5年2月着工。明治6年12月完成。石造2階建、海に面する正面に菊の紋章がさん然とかがやく立派なもので、税関の門出に花を添えることとなった。

幾多の紆余曲折を経て、慶応3年12月7日（1868年）兵庫は開港した。

当日は、雲一つない快晴で、内外の汽船が続々入港し、また、陸上では新築なった領事館に色とりどりの各国国旗がはためき、海岸にはこの状況を見物しようとした大勢の人が押し寄せ、停泊中の外国軍艦18隻も21発の祝砲を放ってこれを祝ったといわれている。

開港とともに、神戸村の東部海岸旧生田川口に税関の前身である兵庫運上所が開設された。この建物は、当時としては超モダンな和洋折衷の広大なもので、窓ガラスは当時の神戸っ子を驚かし、「ビードロの館」と称され、日夜多数の見物人を集めたと伝えられている。

ところが、運上所が開設された翌々日の12月9日には王政復古の大号令が出され、幕府の廃絶と朝廷による親政が明らかにされ、新政府が誕生した。しかも、明けて慶応4年1月3日には幕府軍が鳥羽伏見の戦いに敗れ、兵庫運上所はわずか1ヵ月余で事実上閉鎖の状態となった。

新政府は、同年1月14日王政復古を諸外国に告げる一方、翌1月15日開港事務を含む兵庫地方の諸施設を担当する兵庫事務局を設置した。その後、1月22日には地方行政の起源となった兵庫鎮台が置かれて兵庫事務局はこれに吸収され、さらに2月2日兵庫鎮台は兵庫裁判所と改称された。この間、開港事務も軌道にのり、同2月5日、新政府による神戸運上所が誕生した。

新政府の下では運上所事務を含む外国事務は、地方行政を通じて中央政府の外務省（明治2年外国官を外務省と改称）によって統括されていたが、財政管理機構を整備する必要から明治5年5月13日神戸運上所は大蔵省へ移管された。

一方、明治4～5年頃から、運上所という名称とは別に英語をほん訳した「税関」という語が使用されるようになって呼称がまちまちであったところから同5年11月28日「税関」に統一することが決定され、神戸運上所も同6年1月4日正式に「神戸税関」と改称された。また、同年12月には神戸税関の本庁舎が竣工し、さらに、翌7年1月、税関長以下の職制が決まり、租税助（そぜいのすけ）瓜生寅（うりゅうとら）氏が初代神戸税関長に任命されて、「神戸税関」が名実ともに発足した。

神戸税関が発足した当時の外国貿易は、輸出入が全て外国商人によって行われる居留地貿易あるいは商館取引といわれるもので、日本人の取引は居留地に本拠を置いた外国商人を相手として行われ、直接外国市場とは結びついていなかった。

また、この当時には関係法令が整備されていなかったため、輸入手続等は各国との間に締結された通商条約の附属貿易章程によって行われ、細部の取扱いはもて都度各国領事に因ったうえで行わなければならない状態であった。